



ちびっこ
錬金術師の
恩返し

2

るあか *ruaka*

ill. 81無理無理芸人

ジャック

『黒豹』のメンバー。
粗野な言葉遣いに反して、
根は優しい。

パーシヴァル

聖騎士団の団長。普段は
真面目だが、妹のエミリアの
ことになると暴走しがち。

リオン

冒険者パーティ『黒豹』の
槍使い。かつては
王国の聖騎士団の
騎士を務めていた。

エミリア

道具屋を経営している女性。
実はラインツ国王の
姪っ子で、王家の一員。

アイラ

『黒豹』の紅一点。
豪快な性格で、姉御肌。

???

ノエルの夢に登場する
謎の老人。

ジル

『錬成堂グランキャット』を
営む錬金術師。
不器用ながらも愛情を込めて
ノエルを育てている。

くろすけ

謎の黒猫。
ノエルを一人前の錬金術師に
するべく、奮闘中!

ノエル

本作の主人公。
病で命を落とした少年が
幼児に転生し、今の姿に。
幼くても錬金の才能はヒカイチ!

登場人物

紹介

1話 ノエルの師匠

ここはラインツ王国の国境の町ブライア。すぐ隣の大国、ザイラール王国に近いこともあり、たくさんの冒険者が訪れる賑やかな町だ。

僕はノエル・グランヴィル、三歳。お家は『錬成堂グランキャット』というお店。僕のお父さん、ジル・グランヴィルは錬金術師でエミリアという訳アリのお姫様と一緒に経営をしている。

——実は僕も錬金術師で、しかも前世の記憶を持っている転生者なんだ。錬金術の師匠は黒猫のくろすけ。

くろすけは今は猫なんだけど、元々は人間だったらしく、僕となら頭の中で会話できる。

僕は黒猫のくろすけからの大事なお願いで、くろすけが考案したオリジナルの魔導具を錬金しなくてはいけないという使命がある。

ただそれには超級錬金という、錬金術の中でも一番難しい技術が必要らしい。

そのため、今日も僕は錬金術の修業に励んでいた。

「えっと、真っ黒の布。糸。ラーナ草の綿……目はガラスにするから、カラの砂をこんなもんなかな」

僕はそうブツブツと呟きながら、魔法陣の上に材料を載せていく。

僕のそばでは、くろすけとアイラが座り込んでその様子を見守ってくれていた。アイラはお父さんのために錬金術の素材集めをしてくれている冒険者であり、僕たちの同居人でもある。いつも僕の錬金術の修業に付き合ってくれる面倒見のいいお姉さんだ。

ちなみに僕が今いるのは元々はアイラたちが使っていたポロ小屋、通称アジトだ。

「よし、最後に緑の錬金石と魔石を載せて……つと」
これで準備は完了だ。

「じゃあ、やるね」

魔法陣の上へ両手をかざし、魔力を送り込む。僕の手のひらから放たれた魔力はキラキラと光って降り注ぎ、魔法陣を光らせる。

やがてその光は柱のように高く突き上がり、錬金が完了すると収縮していった。

「おや、可愛いくろすけのぬいぐるみじゃないか」

魔法陣の上でできあがった黒猫のぬいぐるみを見て、アイラがそう言った。

『ふむ、ノエルよ。魔石を入れたからってつきり魔導具を作ったのかと思っただが、ワシの見当違いじゃったか？』

くろすけがそう僕の頭の中に直接語り掛けてくる。

「ううん、見当違いなんかじゃないよ。僕が作ったのはちゃんと魔導具の……はず。いけー！くろすけ号！ピカピカ作戦スタートだ！」

僕がそう言ってくるすけのぬいぐるみのしっぽを引っ張ると、そのぬいぐるみは「ぎにゃー！」

と鳴きながら独りでに走り出す。そして、口を開けると床中の埃をどんどん吸い込み始めた。

「ぎにゃー！」

「なんだい、この前作った『魔導掃除機』のくろすけバージョンじゃないか！しかも、こつちが動かさなくても勝手にやってくれるんだね？」

興味津々にそう言うアイラに、僕はドヤ顔で「そーいうこと！」と返事をした。

「名付けて『魔導掃除機くろすけ号』だよ」

「あはは、いいじゃないかくろすけ号。グランキャットにも一台ほしいねえ」

『にやんと……自動で走行させる機能を付与するとは、大したもんじゃわい』

「ふふん、僕、すごいもんね♪ よし、じゃあグランキャット用にもう一つ同じものを作っておこう」

僕がもう一台のくろすけ号を作り終わると、誰かがアジトの扉をトントンと叩いた。

「おーい、ノエル〜？ いるか〜？」

あつ、この声は……！

「パパーッ！ あつ、エミリアも！」

僕がアジトの扉を開けると、そこにはお父さんとエミリアが立っていた。

今日はお店も定休日だし、遊びに来てくれたのかな？

「いらっしやい、お二人さん。ま、狭いけどゆっくりしていつておくれよ」

「ふふ、私、ここに入るの初めてだわ。お邪魔しますね」

「なんだかんだ俺もだな。お邪魔します」

エミリアとお父さんが小屋へと入る。すると、二人は狭いワンルームをキョロキョロと見渡していた。

「ノエル、お前の師匠はどこだ？」

「ノエル君がお世話になってますってご挨拶あいさつをしたかったのだけれど、今日はいらしていないみたいね」

あつ、そういうこと？

「あはは、相変わらず信じていないんだねえ、お二人さん」

アイラがそう言つてくすくすと笑う。

そうなんだよ。お父さんもエミリアもくろすけが僕の師匠だつて信じてくれないから、今なら本当の師匠がいるかと思つて突撃訪問してきたんだ。

「うーん、予想が外れたか……、まさか、と思つたんだが」

そう意味深なことを呟くお父さんに、僕は「予想って何？」と問い返した。

「ん？ いや、ノエルの師匠に一人だけ心当たりがあつたからなあ。でも、違ふみたいだし、気にするな……つて、このレシピブック！」

お父さんはそう言つて僕の使っているボロボロの錬金レシピブックを拾い上げた。

「あつ、それ、お店の倉庫から勝手に持つてつちやつた……ごめんさい」

まあ、勝手に持ち出したのはくろすけなんだけど。このレシピブックには本当にお世話になつて

いるんだ。

「いやいや、怒つてるんじゃないぞ。むしろ使つてくれた方がこのレシピブックも幸せだろうし、大切に使つてくれよ」

お父さんはそう言つて微笑ほほえみ、僕にレシピブックを返してくれた。なぜだかその笑顔が、少し寂さびしそうに見えた。

「うん、ありがとう、パパ」

なんとなくこのレシピブックのことを聞いてはいけないような気がしたので、僕は受け取るだけで、その後は何も聞かなかつた。

お父さんは「なかなか雰囲気が出ていい工房たくぼうだな」と呟きながら窓の外を眺める。だけど、お父さんの視線は窓の外なんかじゃなくて、もつとずっと遠くを見ているようだった。

「そうだよ。お昼の用意ができたから、一旦グランキャットに帰つてご飯にしましょう？ ジャックさんが『腹減つた』つてうるさいのよ」

ジャックとはアイラと一緒にパーティーで、僕の同居人でもある。

エミリアが下手くそなジャックのモノマネをしたので、ドツと笑いが起こる。エミリアにはジャックのモノマネは無理だ……！ だつて、ジャックはチンピラすぎるし……！

ああ、笑つたら、なんだか僕もお腹が空いてきちゃつた。僕はくろすけ号を一台抱っこすると、みんなと一緒に錬成堂グランキャットへと帰つた。

2話 怪しいパパ

——次のお店の定休日。

僕は二階のリビングでリオンと一緒にくろすけにブラッシングをしてあげていた。リオンはエミリアの近衛さん。今は冒険者としてお父さんの素材集めを手伝いながら、この錬成堂グランキャットの警備をしてくれている。

ジャックとリオンとアイラは『黒豹』というパーティで冒険者ギルドに登録をしている。

お父さんの仕事を初めて手伝った時に集まった冒険者がこの三人で、それからずっと一緒に行動をしているんだってさ。そして、今ではこの一つ屋根の下で一緒に暮らしてる。

「ははっ、くろすけ、気持ち良さそうだな」

リオンの言うように、くろすけは気持ち良さそうにうーっと伸びをしながらゴロゴロと寝返りを打っていた。

「くろすけ、かゆいところはないですか？」

まるで美容師がシャンプーでもしているかのようなようなセリフを投げてみる。

『うむ。首の後ろを頼むわい。自分じゃなかなか搔けなくてのう』

「おっけー、この辺？」

僕がそう言っただけで耳の少し下の部分をブラッシングすると、くろすけは『そこじゃ、そこじゃー！』と嬉しそうに悶えていた。

そこへ、ドシンドシンと誰かが階段を上がってくる音がする。

「よお、帰ったぞー」

そう言っただけでリビングに現れたのはジャックだった。

「ジャック、おかえりー」

「ジャック、ギルドのお仕事をしてきたの？」

僕がそう尋ねると、彼は右手に持っていた酒瓶を高く持ち上げた。

「おうよ、報酬がこの辺じゃ飲めねえ酒だよお。つーか、依頼の現場でおもしろえもん見つけたぞ。おらよ、くろすけ」

ジャックは左手に持っている葉の付いた枝をくろすけの前へと放り投げた。

——その瞬間。

「くろすけ、あゝ……」

くろすけは突如目をトロンとさせて、その枝にスリスリと擦り寄っていた。

「えっ、どうしたのくろすけ……!?!」

『にゃんじゃこの香しい匂いはー！ たまらん、たまらんぞいー！』

枝を抱きしめて一心不乱に頬擦りをするくろすけ。そんなにこの枝、良い匂いするかなあ？

すると、ダイニングでコーヒーを飲んでいたアイラが「あはは、マタタビじゃないか。懐かしい

ねえ。アタシの故郷の近くにはよく生えていたんだよ」と割って入ってきた。

マタタビ！ それは僕も聞いたことがあるぞ。猫が虜とらになっちゃやつだ……！
でも、こんな酔っぱらいみたいになるとは思わなかったな。

みんながそんなくろすけを見てゲラゲラと笑っているのに、当の本人は「ごろにやあゝ、うにやあゝ」と完全に自分の世界に入り込んでいた。

「ははっ、俺はマタタビは名前くらいしか聞いたことがなかったから驚いたな。猫ってこんなふうになるのか……つと、じゃあ、俺はちよつと出かけてくるかな」

お父さんは笑いながらそう言い、出かける準備を始めた。

「パパ？ お出かけ？」

「ああ。ちよつとそこまで行ってくる」

お父さんはこつちを見ないでそう返事をした。

……あれ？ お父さん、なんか、変……？

いつもは『ノエルも一緒に来るか？』とか聞いてくれるのに、今日は聞いてくれないの？

「僕も一緒に行きたい」

僕は、咄嗟とつさにそう言った。しかし、お父さんは否定する。

「いやいや、別に面白い所に行く訳じゃないし、ノエルはみんなと留守番してくれ。俺、ちよつと出かけてくるからノエルのこと、頼むな」

お父さんはみんなの方を向いてそう言うのと、足早に階段を下りていった。みんなは特に気にする

こともなく「いつてらっしやーい」と返す。

くろすけに至っては『んにやあゝ、たまらん』の状態だった。

3話 僕も行かなくちゃ

急に出かけてしまったお父さん。休みの日にお父さんが出かけることはない訳じゃないんだ。僕
の、考えすぎかな。みんなだって、まるで気にしてない。

でも、もしもお父さんが何かに悩んでいたら……？

だって、お父さんはちよつと前まで不眠症で、周囲の音と魔力の気配を遮断しやだんする『魔法の耳栓みみせん』
をしないと寝られないくらいだったんだ。

それに、そうだ！ お父さんがボロ小屋に遊びに来た時だって、どこか寂しそうに見えたんだ。

お父さん、錬金術のスランプを脱して元気になったと思ってたけど、まだ――

僕の脳裏にある記憶がよぎる。

『俺という人生が始まったあの場所で終わろうと思つてさ』

僕が王都のダウンタウンでお父さんに拾われた時にお父さんが呟つぶやいていた言葉。あの時と同じ、
さつきのお父さんにはぼっかりと穴が空いていたような感じがする……！

全身の血がサーッと引いていく。

——お父さん、死んじゃうの……？

「待つてよ、パパ！ 僕も一緒に行く！」

僕は慌てて階段を駆け下りた。これにはさすがにみんなも何事かと下りてきて、くろすけ以外が一階に集合した。

「どうしたんだい、ノエル。そんなに慌てて」

そう言うアイラにリオンも「ジルが休みの日に出かけるなんてこれまでもあっただろ？ 百貨店にでも行ってるんじゃないか？」と続く。

「嫌だ、僕も一緒に行きたい！」

「嫌だつてなあ……おい、どうするよ？」

困り果てるジャック。あのジャックをこんなにも困らせるなんて、僕今相当わがまま言ってるんだ。

それでも、今はどんなにわがままな子だと思われても良い。とにかく僕はお父さんのところに行かなくちゃいけないんだ。

エミリアが「ジルさん、最近何か考えていたみたいだし……向かうとしたら、そうね……」と何かを考えており、やがてジャックへとう告げた。

「ジャックさん、ノエル君をジルさんの所まで連れて行ってあげて。多分ジルさんは、ザイラール行きの馬車に乗ると思うの」

そっか、エミリアもお父さんが最近少しかつたのには気付いてくれていたんだ。エミリア

はお父さんの昔からの知り合いだし、よく分かってるなあ。

「マジかよ。つたく、しゃーねえなあ。おら、行くぞノエル」

そう言つて肩車をしてくれるジャック。

「エミリア、ジャック、ありがとう……！」

グランキャットを飛び出して、ドスッドスツと^{おおお}大股で駆けていくジャック。そして、ザイラール側の出口まで来ると、お父さんが馬車に乗り込むところであった。

「つしゃあ、間に合つたぜ！ おい、ジル！ おらよ、忘れもんだ！」

ジャックは僕を無理矢理馬車に押し込むと「じゃ、行つてら」とさっさと引き返して行つた。

「ノエル!? どうして……」

驚いたように目をぱちくりとさせるお父さん。

馬車のおじさんが「大丈夫かい？ 出発していいのかい？」と声をかけてくる。お父さんは僕を降ろそうとはせず、諦めたように「はい、このまま出してください」と返した。

馬車がコトコトと動き出す。

「パパ、ザイラールに何しに行くの……？」

「……この馬車が、ザイラール行きだつて分かつてんだな……」

「パパ……死んじゃうのは、ダメだよ？」

うるうるると涙をためてそう尋ねる僕にお父さんは目を見開く。そして、ギョツと抱きしめてくれた。

「そっか、ノエルはパパが死んじやうと思つたのか。心配かけてごめんな。でも、パパは死んじやうんじやないぞ。安心してくれ」

「ホント……？ 本当に？」

「ああ、本当だ」

「うわあああん、パパあ……！」

わんわんと泣いてしまう僕。良かった、お父さんが死んじやうんじやなくて本当に良かった。やがて僕が泣き止むと、お父さんはポツリとこう言った。

「……パパは、パパのパパを捜しに行くんだ」

4話 行方不明の父

馬車はトコトコと軽快に街道を進んでいく。

「パパのパパって……僕のおじいちゃんってこと……？」

「はは、そうだな。ノエルのおじいちゃんだ」

「おじいちゃん……いなくなっちゃったの……？」

僕におじいちゃんがいるんだったら、一目でいいから会つてみたかったな。

「そうなんだよ。急に、いなくなっちゃったんだ……」

お父さんはそう言つて寂しそうに馬車の外を眺めた。あつ、この顔、ボロ小屋の時の顔と一緒にだ。

「ええ……行つてきますも、言わなかったの？」

「ははは。そうだな、なんにも、言ってくれなかったんだ……」

今僕のお父さんが何も言わずにいなくなつてしまつたら、僕はどうなつてしまうのだろうか。

「そんな……」

僕も一緒になつて落ち込んでいると、お父さんはこう話を切り出した。

「パパの父さん……ノエルのおじいちゃんは、ザイラール王国軍の元帥げんすいっていう、軍で一番偉い錬

金術師だったんだ」

「えーっ、おじいちゃんも、錬金術師!? それに、一番偉い人!? 急につて、いつからいないの？」

お父さんは確か元魔道軍大將まじょうだったから……あわわ、僕、すごい人の孫ですごい人の息子だ。

「そうだな……三年半くらい前、つまりノエルが生まれた時くらいからかな」

「そんな前から!？」

「ああ。一生懸命捜したんだけど見つからなくなつてな、ザイラール王国では、死んだことにされてしまった。だけど、パパは父さんが死んじやったところをこの目で見た訳じゃないから、信じられなくなつてな……」

「それは、そうだよ！ きつと、おじいちゃんはどこかで生きてるよ！」

見つからないから死んじやったって決めつけるなんて、そんなザイラール王国の方が間違つてる。

「ノエル、ありがとな……。だから今日は、ザイラール王国に手がかりを探しに行くんだ。ノエルも一緒に探してくれ」

お父さんは優しく微笑む。その笑顔からは、少しだけ寂しさが消えているような気がした。

「うん！ 僕も一生懸命探すよ！ 見つかるといいね、手がかり！」

◇

ザイラール王国の王都『ザイディア』へと到着。

「うわあ、大きな建物がいっぱい！」

石レンガの高い建物が軒を連ね、その重厚な雰囲気は圧倒された。そう言えば僕も、ここ生まれだったっけ。

僕とお父さんは馬車を降りると、王都の入り口付近にあった地下への階段を下りてダウンタウンへと向かった。

「うっ、なんかばつちいね……はつくしゅっ！」

上層とは雰囲気が一変。じめじめとしていて埃っぽく、なんだか薄暗いところだった。

「ごめんな、だから面白くないって言っただろ？」

「だいじよぶ、僕、我慢できる」

僕はそう言っただけ鼻をつまんだ。そして、ダウンタウンの中にあるゴミ溜めへと到着

する。そのゴミ溜めを見て、僕はハツとした。

——ここ、僕が捨てられてお父さんに拾われたところだ……！

「パパな、ここで父さんに保護されたんだ」

「えっ……！」

お父さんも、捨て子だったの……？ しかも、僕とおんなじ場所……。

「パパはこのダウンタウンの生まれでさ、両親は早くに病気で死んでしまった。五歳の頃にゼオル……父さんに保護された」

「えっ、ゼオル!? ゼオル・グランヴィル!? 僕のおじいちゃん、ゼオル・グランヴィルなの!?」

待って、頭の中がパニックだ。お父さんは初めからここで生まれて、おじいちゃんに保護されて……。それで、僕のおじいちゃんはゼオル・グランヴィル！

「何……!? ノエル、父さんのこと、知ってるのか……？」

お父さんは驚いたように目を真ん丸にしていた。

「うん、あのね、ジャックがまだおじさんじゃない時、ゼオル・グランヴィルって人にジャックの村を助けてもらったことがあるんだって」

「なんだって!? なんだよアイツ、俺には、んなこと一言も言わなかったのに、ノエルには話していたのか……」

「ほら、パパ、落ち込んだじゃってたから、聞けなかったって、ジャック言ってたよ？」

「んなっ……。あのジャックに、そんな気を使われていたとは……」

不覚と言わんばかりにがつくしと項垂れたお父さんに、僕は思わず「ふふっ」と笑みがこぼれる。そんな僕を見たお父さんもまた「はははっ」と笑っていた。

5話 錬金術の絆きずな

「そう言えば、ノエルの使ってるレシピブック、父さんのやつなんだぞ？」

お父さんが得意げにそう言う。僕たちは未だにゴミ溜めの前で話し込んでいた。

「えーっ、そうな——あつ！ そう言えば、裏に名前が書いてあった気がする！」

確か、裏表紙のところどころ掠れた状態で「ゼ……ル……ンヴィル」って！ あれ、ゼオル・グランヴィルのことだったんだ！

「そうだろ？ 捨てられなくてな。店に持ってきて倉庫にしまっておいたんだ」

「そうだったんだ……。おじいちゃんの大切なもの、僕……本当に使っちゃって大丈夫だった？」

そんな大事なものだなんて知らなかった。今更罪悪感が押し寄せてくる。それにしても、くろすけがあんなところにレシピブックがあったのを知っていたのも不思議だな。

「良いんだ。前にも言ったけど、あのレシピブックもノエルに使ってもらえてきつと喜んでるはずだ。それに……。パパも嬉しいんだ。父さんの錬金術が、お前にまで引き継がれてんだなって思ってた」

お父さんはそう言って「ははっ」と笑った。

そんなお父さんの懐かしむような表情を見て、僕はなんとなくこう尋ねた。

「おじいちゃんが錬金術師だったから、パパも錬金術師になったの？」

お父さんは、大きくうなずいた。

「ああ、そうだよ。錬金術は、パパと父さんを繋ぐ唯一の絆だったんだ。錬金をしている父さんがかつこよくって、自分もあんなにかっこいい錬金術師になりたいって、そう思ったのがきっかけだ」

「そっか、そうだったんだ……！」

お父さんも、僕と同じだ。僕だって、お父さんが錬金術師をしているから錬金術師になりたいって思ったんだ。お父さんに直接教えてもらった訳ではないけれど、僕にとって錬金術は、お父さんとの絆であることに違いない。

そっか、お父さんは……。おじいちゃんがいなくなっちゃって、それが寂しかったから、絆である錬金術がスランプになっちゃったんだ。

お父さんは、再び口を開いた。

「パパな、一度はもう錬金術なんてやめてやるって思ったんだけどな……。ノエル、今度はお前が錬金術でパパとの絆を結んでくれたんだ。そのおかげで、パパも父さんとの絆を思い出してな、もう一度、諦めずに探してみようって、そう思ったんだ」

「パパ……！」

「ここ数日父さんのことを思い出していたからさ、パパ、辛気臭い顔しちゃってたかもだよな。だ

からノエルは心配して追いかけてきてくれたんだろ？ でも、落ち込んでたんじゃやない。もう一度立ち上がろうと思っただけなんだ。だから、安心してくれ、な？」

「うん……！ パパ、話してくれてありがとう！ 僕も、おじいちゃん一緒に捜すからね！ 手ばかり、頑張つて探そ？」

「ああ、ありがとう、ノエル！ よし、父さんはダウンタウンで人の世話を焼くのが好きだったから、ここを隅々まで調べてみよう」

「よし、ダウンタウンの探検だー♪」

僕とお父さんはダウンタウンを隅々まで探検してみたけれど、おじいちゃんの痕跡は何も見つからなかった。だけど、収穫はゼロではない。僕とお父さんとおじいちゃんの錬金術の絆を知ることができたのだから。

その後王都の上層も少し探検をさせてもらい、二人で仲良くグランキャットへと帰還するのであった。

6話 そいつは、そんなじいじで来たんだ

お父さんと一緒にザイラルへ行ってから数日経ったある日の夜のこと。

もう寝ようと思つてくるすけと共に自室に行き、一緒にベッドへと潜り込む。

すると、くるすけが念話でこんな話を切り出したので、部屋の外に声が漏れないように念話での話し合いが始まった。

『ノエルよ。錬金術、かなり上達してきたではないか』

『えへへ、そうでしょ？ もう、作りたいと思つた魔導具のほとんどを作れちゃう気がするよ』

『うむ。じゃから、そろそろ超能力の修業もしようではないか』

『超能力……？』

きよとんとする僕。

『まさかお主、自分が超能力のスキル持ちだということを忘れた訳ではあるまいのう？』

くるすけの驚いた様子に、僕はハツとした。

『そういえば僕、そんなことできたんだ……！』

『ぎにゃ!?』

驚いた顔で固まるくるすけ。

『お主が今ワシと念話で話せておるのは、その超能力のおかげじゃろうて』

『あはは、そうだった、そうだった』

もう、くるすけと話ができるのが当たり前すぎて、超能力だってあんまり意識していなかったんだ。

『お主、初めて自分に超能力のスキルがあると分かった時、「物を浮かせたりできそう」とか言つておったではないか。実際に浮かせてみたいとは思わなんだのか？』

『うーん……』

物を浮かせられるようになりたいと思っていたのは、前世の病院で寝たきりだったからなんだ。でも今は、たくさんの人に愛されて自由に生活できているから、特に不便もないんだよね。

——幸せなんだ、僕。

『超能力のおかげでくろすけと話ができるようになったから、この力があって良かったとは思っただけど、くろすけと話せたらそれで良いかなって、今は思ってるよ』

『ほっほっほ。そうか、自身の力をむやみにひけらかしたりなどしない。お主らしいのう』

くろすけはそう言っただけで肉球をペロペロと舐めて、満足そうに手のお手入れをしていた。

『そうなのかな？ でも、なんでくろすけは超能力の修業もしようって思ったの？』

『うむ……。お主はワシがある目的のために超級錬金の魔導具を作れるようになってほしい、と言ったことは覚えておるか？』

『うん。もちろん覚えてるよ。だって、今はそのために錬金術の修業をしていたんじゃない』

『その魔導具は、ワシの理解が正しければ……第一工程『想造』の過程でお主の超能力が必要となるのじゃ』

錬金術の主な工程は、想造、分解、成形の三工程になっているとくろすけから聞いたことがある。想造は、生成後のアイテムの姿形を想像し、用途や仕組みを理解することらしい。

『えーっ、そんなことって、ある？ ねえ、まだその魔導具がどんなものか教えてくれないの？』

『あくまでもワシの理論上は、の話じゃ。それが正しいのかどうかは正直作ってみるまで分からん。

魔導具がどんなものかは……うむ、そうじゃのう。お主が超能力の修業をして、ワシが客観的に見てレベルアップをしたと判断すれば、そろそろ話してやるとするかのう』

『ホント!? じゃあ、僕、超能力の修業頑張るよ!』

くろすけは超級錬金が必要な魔導具って言うだけで、それがどんなものかはずっと教えてはくれなかった。

理由はなんとなく分かっているんだ。多分、すごく大変なことだから、僕がいつでも諦められるように、僕に責任を感じさせないようにって、そう思ってくれてるんじゃないかな。

だから、僕がその魔導具を作れるって確信してからじゃないと、多分話したくないんだ。

それでも、くろすけの動機がなんであれ、僕はくろすけの力になりたい。どんなに大変なことだって頑張れるよ。

だって、くろすけは僕の大切な相棒なんだから。

『うむ！ それなら明日から早速超能力の修業に移るとしよう!』

『はい、師匠! あっ、でもさ——』

『なんじゃ、締まらんのう』

『いつどこで、修業する？ 僕、あんまり超能力が使えるってみんなにバレたくないんだけど』

『うむ。それはワシも同意じゃ。黒豹のやつらにはワシと会話できることは知られてしまっただけだが、それが超能力によるものだとお、おそらく誰も思っではおらんじゃろうて』

『うん……』

多分、この家のみんなは超能力があるからって僕のことを避けたりなんかはしなないと思う。それでも、あえて言う必要はないかなって。

『じゃから……そうじゃな、夜中はお主の発音にも悪いし、リオンやジルあたりがお主が起きておることに勘付いて部屋を訪ねてくる心配がある。となれば、店の開店前にこの部屋で行うのが良いじゃろう』

『そっか！ パパとエミリアはお店の準備があるし、黒豹の三人は朝一で素材集めに出かけるから！ よーし、それなら明日から頑張るぞー！』

僕はそう気合を入れると、くろすけを抱き枕まくらにして眠りにつくのであった。

7話 浮け！ くろすけ号！

——翌朝。

朝食を済ませて黒豹の三人を素材集めに送り出し、お父さんとエミリアが一階で開店準備を始めたのを確認する。よし、超能力の修業の時間だ！

僕とくろすけは一目散に階段を駆け上がり、自室へと引きこもった。

「超能力の修業って……何しよう？」

僕は根本的な質問をくろすけへと投げかけた。

「んじゃ」

くろすけは部屋の隅に置いてあった『魔導掃除機くろすけ号』を頭で押して僕の前へと持つてくる。

『これを、浮かせて自由に動かせるようにしてみせるのじゃ！ さすればお主の超能力がレベルアップしたと認め、ワシも魔導具の話をしようではないか』

「なるほど、分かりやすい！」

『さて、では具体的な修業内容へと移るが……。お主は現在、超能力の中でも『念話』のみができる状態じゃ。そして、次に習得しようとしておるのが『念力』と呼ばれるもの。『念』を操ると言った意味では、本質はどちらも同じなのではないかとワシは推測しておる』

「えーっと、つまり……？」

僕は首を傾げた。だからつまり、どうすればいいんだ……？

『つまり、ワシに念話で話しかける要領でくろすけ号に『浮け！』と念じてみよ、ということじゃ『なるほど！』

僕は早速心の中で『くろすけに話しかけるみたいに』と唱えながら、『浮け！』と念じてみた。

しかし、くろすけ号はびくともしない。その代わりに、くろすけから『ワシに話しかけておるぞー』と返事があった。

「ええ、そんなぁ……」

うーん、どうしようかな。今度はちゃんとくろすけ号の方を向いて……もっと強く念じてみよう。

『浮けー！ ジジイ猫号ーっ！』

『誰がジジイ猫じゃ！ そしてやかましいわい！ 全く、頭の鼓膜こまくが破れるかと思つたわい……』
くろすけはそう言つてやれやれと首を横に振つた。

……頭の鼓膜こまくつて何。

「頭には鼓膜なんてないよ。くろすけ、頭大丈夫？」

『分かつとるわい！ ただのお茶目な念話ねわジョークじゃて！』

ああ、ダメだ。今度は念話ねわジョークとか言うパワーワードが気になつて集中できない。

僕がうーんと頭を抱えていると、くろすけはこう助言すけごんをしてくれた。

『お主、ワシに話しかける要領ようりやうでという言葉の「ワシ」に囚われ過ぎてはおらんか？ まずは、念じるよりもくろすけ号に話しかけることを意識してみるがよい』

「くろすけ号に話しかける……」

僕はくろすけの助言すけごん通りにくろすけ号へと話しかけてみた。

『おーい、くろすけ号、聞こえてるー？』

その後、すぐにくろすけに「今の聞こえた？」と尋ねる。すると、くろすけは『いや、今は何も聞こえなんだのう』と返事へんじしてくれた。

よし、じゃあ次は……。

『くろすけ号、浮いて！』

僕が必死ひっしにそう念じると、ついに目の前のくろすけ号がぶかぶかと空に浮き上がったのである。

「おお、できた！ できたよくろすけ！」

「にやあふ」

——そう、僕のテンションが爆上がりした、その時だった。

その場にぶかぶか浮いていたはずのくろすけ号は独りひとりでに部屋の出口の方へと動き出す。

「えっ、なんで!? 僕、何も念じてないのに！」

『ふむ……どうやら力のコントロールに課題があるようじゃのう』

「どうしよう、このままじゃくろすけ号、部屋から出ていっちゃうよ!？」

『なあに、心配はいらん。お主が戸を開けん限り、くろすけ号が出ていってしまうことはないじゃろつて』

部屋の戸を、開けない限り……よし、開けなければ大丈夫、開けなければ……。

——しかし、僕の気持ちとは裏腹に部屋の戸がゆっくりと開いてしまったのである。

「戸、開いたけど!？」

「にや!？」

『お主、変に意識をしすぎではないのか!? 今のお主はおそらく、気にかけたものに念力を働かせてしまう状況じやうきょうに陥おちつておる。意識いしきをするのをやめてみるのじゃ』

そうくろすけが助言すけごんをする傍たわららで、くろすけ号はぶかぶかと浮かんだまま廊下ろうかへ出ていってしまつた。

「ああ、ダメだ！ 今は、あいつを止めないと！」

「ぐるにや……」僕とくろすけもまた、部屋を飛び出した。

8話 ちっちゃい師弟のハラハラパニック

カラン、コロロン。

「ただいまー」

「帰ったぞー」

「おかえりー、ご苦労さん」

「おかえりなさい」

えっ、もう黒豹の三人が帰ってきちゃった！ ヤバイヤバイ、急いでくろすけ号を捕まえな
いと！

すると、一階への階段に差し掛かったくろすけ号は、急にやる気なくなったようにその場に落
下し、コロロン、コロロンと階段を落ちていった。

「と、止まった……！」

『ふう、間一髪じゃったのう』

「ん？ くろすけ号？」

アイラの声。続いてリオンの声も聞こえてくる。

「今、階段転がってきたよな？」

うう、念力は止まったけどみんなが気にし始めた……。よし、僕が落としちゃったことにしよう。

僕は「えへへ、僕が落としちゃった！」と言いながらくろすけと一緒に一階へと駆け降りる。

黒豹の三人は「なんだ、ノエルか。壊すなよー」と軽く流す。

ふう、良かった。くろすけ号を拾ってさっさと二階に帰ろう。

そう思って床に横たわっているくろすけ号に近づこうとした、その時――

くろすけ号の尻尾しっぽが勝手に引っ張られるように動き、電源が入ってしまった。

「ぎにゃー」

横たわっていたくろすけ号は勝手に起き上がり、急に掃除をし始める。あわわわ、どうしよう、

念力で電源を入れちゃった……！

「ん？」

「掃除始めたな……」

よそ見をしていたアイラとリオンの視線が再びくろすけ号へと集中する。

でも勝手に電源が入るところまでは見ていなかったようだ。お父さんとエミリアは在庫の確認に
集中しているし、ジャックはお客さん用のベンチに腰掛けてくつろいでいる。

よかった、セーフ！

「くろすけ号、待って待ってー！」

僕は遊んでいるフリをしてくろすけ号を追いかけ、電源を切るために尻尾を引っ張ろうとしてみ

る。しかし、電源はびくともしなかった。

「あれ？　なんで？　オフにできない！」

『ノエル、お主、念力で尻尾を引つ張り続けた状態にしておるのじゃ！　一度尻尾を引つ込めてからもう一度引かんと、構造的にオフにはならんぞい』

そういうこと!?

「なんだ？　故障か？」

僕がオフにできない、なんて叫んだせいで、ジャックまでもがこちらに注目し始める。

一回尻尾への念力を切らないと……！

うわーん、全然尻尾が引つ込まない。ガツチガチに引つ張つちやつてる。なんでだよ！

すると、僕の脇からくるすけがすさまじい猫パンチを繰り出した。

——ベシッ！

くるすけ号にクリティカルヒットする。

「ぎ、ぎにゃ……」

くるすけ号はブスツ、ブスツと微量の煙を出しながらその場で転がり、静止した。

『すまんノエル。強硬手段を取らせてもらったわい』

『うん……ありがと』

「あーあ、もう壊れちゃったのかい？」

「寿命、早くね！」

アイラとジャックはそう言うが、リオンは優しく微笑みながら「また次もつとすごいの作ったらいいさ」と励ましてくれた。

「うん、そだね、ありがと……」

僕はようやくくるすけ号を拾い上げた。

ふう、これで一安心だ。もう、勝手に動くなよ——つて、思ったのがいけなかったのか。

くるすけ号は勝手にふわふわと浮き始める。ヤバイ！

僕は慌ててくるすけ号を捕まえ、これ以上動かないようギュッと抱きしめた。誰も見てない!?

誰も見てなかったよね!?

「あれ？　今それ、浮かなかったかい？」

アイラだ。

「えっ、き、気のせいじゃない？」

僕は咄嗟にそう誤魔化す。

「浮くわけねえだろ、アホか」

ジャックはそう言つて立ち上がり、うーつと伸びをする。

「あはは、そだね。けど、アホは余計だよ！」

アイラがジャックのお尻を思いつき蹴飛ばし、ジャックは「いつてえ！」と悲鳴を上げた。なんか、このやり取り前にも見たことあるな……。

「そーいやさ——」

リオンがお店の壁に槍を立てかけながら話題を振る。何気なくその槍を見てしまった僕。すると、今度は槍が独りでにススス……と動き出してしまったのである。

『ノエルよ、落ち着かんかい！』

『だって、どうすればいいのか……！』

『今は話に夢中で誰も槍を見てはおらん。逆に動くよう念じて元に戻すのじゃ！』

『分かった、やってみる……！』

頼むから元に戻って……お願い！

僕がそう念じると、槍はゆっくりと元に戻り始める。

『いぞ、ノエル！ 少しずつコントロールできるようになってきたではないか！』

『よし、このまま元に戻して——』

『ストップじゃ！』

『えっ！』

くろすけにそう言われて槍をその場でストップさせると、リオンが話し込みながら槍のあった場所へと手を伸ばしていた。そして、何もない場所を掴もうとして、空振りする。

「あれ……？」

自分の空振った手を不思議そうに見つめるリオン。そうか、リオンが槍を掴もうとする仕草に気付いて、くろすけは止めてくれたんだ。

「てめえ、何してんだそれ」

ジャックの冷めたツツコミが入る。

「いや、あれ？ ここに置いたと思ったんだけど……」

リオンは何か納得がいかないと言った顔で、少しズレた位置にあった槍を手にとった。

『いかん、ノエル、撤収じゃ！』

『うん！』

僕はくろすけ号を抱えて、くろすけと共に二階へと駆け上がり、自室へ逃げ込んだ。

「ぜえ、ぜえ……」

「にやあ……」

疲れ果てて床でぐったりとする僕とくろすけ。一時はどうなることかと思っただけど、なんとかバシなくてよかった。

『ノエルよ、お主の超能力のスキルは確実にパワーアップしておるぞ』

『うん……最後はコントロールもできるようになってたしね……』

『これはワシの理屈じゃが、お主はいつも無意識に念話を使いこなしておったゆえ、意識するとかえって上手いかんのではないじゃろうか』

『うん、そうなのかも……。本当はまだ練習したいけど、いっぱい念力を使っちゃったから、ちよつと疲れたかも』

『うむ、無理は禁物じゃ。また明日頑張れば良い』

『そうだね』

また明日から気を取り直して頑張ろう。

夜、いつものようにくろすけを抱き枕にして眠りにつく。

——なぜか、この夜は不思議な夢を見たんだ。

9話 くろすけの夢

夢の中でたまに、今自分夢を見ているんだって気付く時あるよね。今の僕は、まさにそれだった。

——どこかのお城の中の風景。

ここは、玉座の間、かな？ 見覚えのない玉座の間。ラインツ城の玉座の間なら行ったことがあるから知っているけど、そこはインテリアが全然違う。

玉座の間にはたくさん兵士が集っている。あれ、僕こんなところにいい？ 三歳児がいたら浮いちゃわない？

玉座の隣に立っている偉そうなおじさんが何かを話していた。何を話しているのかは聞こえてこない。全くの無音だ。くう、じれったい。

声は聞こえないけれど、兵士たちが一斉に喜んでいるのは表情で分かる。なんか楽しそうだし、僕も交ざりたいよ。

◇

あれ、急に周りの風景が切り替わった。夢ってぼんぼん飛ぶからやめてほしいよね。

ここは……牢屋？ あっ、分かった。RPGゲームとかでよくある、無実の罪で捕らえられている人を解放させて——なんてストーリーが始まるんじゃない？

しかし、両サイドに並んでいる牢屋には誰も入っていないくて、ただただ空っぽの牢獄を進んでいく。そして、一番奥の重たそうな扉を開けると、その先には広いホールが広がっていた。

そのホールの中央まで進んでいくと、視界が床へと落とされる。しゃがんで床を調べているんだ。——その時、突然誰かの心の声が聞こえてきた。

『あのリッチは一体どこへやったというのだ。ふむ、錬金術の形跡か……。一体誰が、何を企んでおる……？』

えっ、この声……くろすけの念話の声とそっくりなんだけど……。

◇

再び城内の風景へと切り替わる。さっきの牢屋からお城に戻ってきたのかな。

ここは玉座の間ではなくて、普通の部屋みたいだ。作戦会議とかをする部屋っぽい。

何人もの兵士が席に着いて同じ方向を向いている。その視線の先には、玉座の隣で偉そうに話していたおじさんが、今回も偉そうに話していた。

すると突然、その偉そうなおじさんの付近に文字が現れる。

『ローベル・アイズフト。ザイラール宰相 錬金術師』

その文字の下にはステータスっぽいものが書き連なっていた。

ふうん……この偉そうなおじさん、ローベルっていうのか。宰相ってことは、偉そうなんじゃなくて本当に偉いんだね。でも、なんでこの人の個人情報に文字になったんだ？

というかこは、ザイラール城だったのか。

ローベルの頭の上から足の先まで眺めると、装備している武具や所持しているアイテムが次々と文字化されていった。

そして、『リッチの宝玉』という名前のアイテムを表示したところどころくろすけ風の心の声が聞こえてきた。

『やはりこやつが持つておったか。確かにこやつも凄腕の錬金術師、あの牢獄に捕らえられておったリッチをどうにかできたとしても不思議ではない。ふむ、少し様子を見てみるとしよう』

リッチとか、『リッチの宝玉』とかつて、なんのことを言っているのだろう……？

初めて聞く言葉だからよく分かんないよ。早く続きを、もっと心の声を――

――しかし、ここで夢は終わり、僕は目を覚ました。

◇

――翌朝。

「うーん……」

ベッドから身体を起こし、昨夜見た不思議な夢をもう一度振り返る。

あの心の声、しゃべり方は今ほどジジイっぽくはないけど、確実にくろすけの声だった。

――あれは、くろすけが人間だった頃の記憶？

そう考えると、あのステータスやらアイテム名が文字化されていたのは、くろすけの持つ『鑑定眼』のスキル効果だったと説明がつく。

でも、なんでくろすけの夢なんて見られたんだろう？

もしかして、超能力のレベルが上がったから、夢を共有できるようになった……？

そうだとしても、まだ色々と分からないことがたくさんだ。せめて、心の声だけじゃなくて周りの会話も聞けたらよかったのに。

そうだ、もっと超能力を鍛えたら、もっと詳しく見られるようになるんじゃない！

よーし、いっぱい修業して、あの夢をもう一度見るんだ！

『ノエルよ、何を寝ぼけておるのじゃ。さっさと着替えんかい』

「うん！ おはよ、くろすけ！ 今日も超能力の修業、頑張っちゃうからね！」

『ほっほっほ。やる気があって何よりじゃ』
僕は朝の支度を済ませると、今日も念力の修業に励むのであった。

10話 またあの夢

——ある日のリビングにて。

アイラがダイニングでコーヒーを飲みながら依頼書の確認をしているのを眺めていた。どんどんとコーヒーは減って行って、もう飲み干しちゃうそう。

おかわり、注いであげようかな？

そう思った直後、『魔導抽出機』にセットしてあったビーカーが独りでにふわふわと浮き始め、中に入っていたコーヒーをアイラのマグカップへ注いでいく。

ビーカーはコーヒーを注ぎ終わると、満足そうに元の位置へと戻っていった。

そしてアイラがマグカップを口へ持つていくと——

「熱っ……あれ？ アタシ、今結構飲んだよね……？」

アイラはマグカップの中身を見て目をぱちくりとさせていた。

超能力の修業を重ねていくうちに、僕は大事なことに気付いた。

錬金術は——想いを造るもの。

僕はずっと、この錬金術のノリのまま念力を使おうとしていた。

でも、違ったんだ。念力は——脳で指示するもの。

感情とは切り離して別のものだと考えると、だんだんとコントロールができるようになっていったんだ。

まあ、それでもまだまだ修業中の身ではあるんだけど。

でも、多少は念力にも慣れてきたような気がする。

——そう思い始めた夜。

いつものようにくろすけを抱き枕にして眠ると、またあの夢を見ることができたんだ。

◇

——夢だ。

あつ、この風景、初めてあの夢を見た時の、ザイラル城の玉座の間だ！

玉座の間にはたくさんの兵士が集っている。あれ、この光景、前回見た時と全くおんなじ！

——でも、今回は兵士たちがざわついているのが聞こえてくる……！！

ほらやつぱり！ 超能力のレベルが上がったから！

もうすぐあの国王の隣にいるローベルって宰相が何かを言うはずなんだ。

ワクワク、ドキドキ……♪

すると、国王の「静まれ」の一声でしんとする兵士たち。そして、ローベルが口を開いた。

「王都ザイディアの郊外に出現していたSランクの魔物『リッチ』であるが、我が息子であり魔道中將でもある『ブルーノ・アイズフト』によって討伐が完了した。これでラインツ王国との四年に一度の『同盟記念祭』も安心して迎えることができるようになった！」

部屋中から「わーっ！」と歓声が沸き起こる。

そっか、『リッチ』って名前は凶悪な魔物の名前だったんだ。それがこの近辺に出現してて騒ぎになってたけど、討伐できたからみんなこんなに喜んでたのか。

それは僕も喜ぶよ。

それにしても、『同盟記念祭』か。ザイラール王国とラインツ王国は同盟を結んでいて仲良しなんだね。四年に一度の祭典があるなんて、オリンピックみたいで盛り上がりそう。いいなあ、僕も参加したい。

それで、この後はあの誰もいない牢屋に場面が切り替わるんだよね。

——そう思っていたのに、この風景はなかなか切り替わらなかった。

……あれ？ 前回と展開が違う。

風景は切り替わることなく、その場が解散になると、玉座の間を出て廊下を歩く兵士の中に溶け込む映像へと自然と移っていった。

あの後、僕が視線を共有している人、多分くろすけは兵士の人たちと一緒にこうやって玉座の間から出ていったのか。つまりくろすけは元々ザイラールの軍人さんだったってことかな。

『ふう。あの若造に任せるとローベルが言い出した時は不安で仕方なかったが、無事討伐できてよかった』

そう、くろすけの心の声が聞こえてくる。

確かに良かった……けど、なんかくろすけ上から目線じゃない……？

くろすけはみんなとは別の方向へと進み、一人で廊下を歩いていった。そしてふと、ある扉の前で立ち止まる。

『む？ なんだこの異様な気配は？ 地下牢からか？』

えっ、異様な気配？

くろすけは魔法陣の描かれた布を取り出し、持っているものでササッと鍵を錬金する。そして、扉の鍵を開けてそのまま地下牢へと降りていった。

——そこは、前回見た牢屋だった。

なるほど、前回見た時のあの牢屋は、ザイラール城の地下牢だったと。でもね、くろすけ、ここ、結局何もいなかったんだよ。

しかし、くろすけが一番奥の広い牢獄へと到着すると、そこには、魔道士のような魔物が結界の中に閉じ込められていたのである。

えっ、なんで？ 前来た時には何もいなかったのに。

すると、くろすけが『観察眼』を発動したのか、魔物のステータスが文字化されていた。

『リッチ』
Sランク アンデッド種

これがリッチって魔物なの!? 討伐、されてないけど!?

『なぜリッチが? ブルーノによって討伐されたのではなかったのか? これは、少し調べてみる必要があると思うだ』

うん、僕もそう思う。だって、あのローベル宰相、嘘ついてるってことだもんね。

その後くるすけがブルーノ中将率いる『ブルーノ隊』の宿舎をあれこれ探っている場面へと移る。くるすけって、そんなに自由にあつちこつち動き回れる兵士さんなんだ……。

そして、討伐ではなく捕らえるようブルーノ中将へ指示を出したのは父親であるローベル宰相だった。

これは、アイズフト親子の秘密事項のようで、ブルーノ隊の隊員たちは討伐したと思い込んでいたようだった。

11話 変身薬

この夢、今回はまだまだ終わりそうにないな。やっぱ僕が、超能力のコントロールができるようになってきたからかも。

夢の場面は移り変わり、ザイラル城内のどこかの一室へと切り替わった。すると、くるすけの視界にある人物が映り込んだ。

——お父さんだ!

そうだよ、お父さん、ザイラルの元魔道軍大将だもん。くるすけの夢に出てきたっておかしくはないよ。見た目は今のお父さんと同じくらいか……ちよつと若いくらい?

しかし、お父さんは変な男に絡まれていた。

「これはこれは、グランヴィル大将ではございませんか。この度は、あなた様を差し置いて部下であるこの私ブルーノ・アイズフトがリッチ討伐という手柄を立ててしまい、誠に申し訳ございませんでした。優秀過ぎるがゆえに、どうかご勘弁を」

うわあ、この人がブルーノ中将か。

僕の第一印象は最悪なだけけど、大丈夫そ? それに、討伐したとかいって、本当は地下牢に閉じ込めてあるんでしょ? 僕もくるすけも知ってるんだからな。



「ああ、討伐おめでどう。これで同盟記念祭も安心だし、俺は別に手柄とか気にしないから。これからもどんどん手柄立ててくれ。じゃ、俺この後任務あるから」

お父さんは軽くそう流すと、こちらへ向かって歩いてくる。ブルーノ中将は「クソがつ、強がりやがつて、くう、気に入らない！」と地団太を踏んでいた。

はい、お父さんの勝ちー！ 大人の対応ー！ 悔しがったブルーノ中将の負けー！

お父さんがくろすけの隣を通り過ぎるタイミングで、くろすけはコソツとこう呟いた。

「気にせんでええぞ」

「してねえって。してるように見えたか？」

「まあ、見えなんだが、念のためな」

「フオローどうも」

そんな軽いやり取りをコソツとして、お父さんは去っていった。またねー、お父さん！

っていうか、くろすけとお父さんめっちゃくちや仲良くない!?

なんなの、あのマブダチ感。くろすけは、人間の時からお父さんのことを知っていたんだ…。

そして、くろすけも廊下へと出る。くろすけはどこかへ歩いて行きながら、こんなことを考えていた。

『明日は友好国ラインツとの同盟記念祭。消えたリッチ、ローベルの所持するアイテム、リッチの宝玉。あやつが何を考えておるのか把握はあくしておく必要がある。私の勘違いや思い過ごしならそれでよい』

そうか、この場面はもう、リッチは牢屋から姿を消していて、くろすけがローベル宰相を鑑定眼で観察して『リッチの宝玉』というアイテムを見つけた後の場面なのか。

くろすけは個室へ入ると、テーブルの上に置かれている錬金鍋から何かの薬品を取り出した。ピンク色の液体が入っている。なんだろうこれ、不味そうだな。

そして、コルク栓を外すと一気に飲み干した。

『……不味^{まず}っ』

ぷっ。やっぱ不味いのか。

すると、視界の位置がどんどんと下がっていく。そして窓際へと移動をすると、窓に映っていたのは僕が毎日見ている黒猫の姿だった。

やっぱり、くろすけだ！ 黒猫の姿になったってことは、あの薬品は『変身薬^{へんしんやく}』ってところかな。黒猫となったくろすけは廊下へと出て、あちこちを歩き回る。

そして、曲がり角の陰からローベル宰相が玉座の間へと入っていったのを確認した。

『うむ。ローベルは予定通りに動いておる。今がベストタイミングだな』

くろすけは心の中でそう呟くと、壁に付いていた通気口の中へと入る。そして狭い通路を突き進んでいき、ある部屋の中へと到着した。

『よし、ここがローベルの私室で間違いなさそうだな。さて、見させてもらおうぞ、ローベルよ』

真つ黒な手でテーブルの資料をガサゴソと漁る。

くろすけが手を止めたのは、『リッチの宝玉』と書かれた資料を見つけた時だった。

その資料には、『リッチの宝玉』とはリッチを錬金術でその中に封じ込め、召喚して使役をすることができ……的なことが書かれていた。

牢屋の中に捕らわれていたリッチがローベル宰相の持っている『リッチの宝玉』の中へと移されたっつことか。

錬金術でこんなものが作れるなんて、ちよつと怖いな。

『これは既に分かりきっておる。他に、何か怪しい資料はないものか』

くろすけは『リッチの宝玉』の資料をサツと払うと、再び机を漁っていた。

そして、再びある資料を見つけて手が止まる。

『……これは！』

えっ、なになに？ ちょ、くろすけの手が邪魔でよく見えないんだけど。……ん？ パーシヴァル・クラウデイス” って書いてある……？

パーシヴァルって、エミリアのお兄様でライントツ王国の聖騎士団長じゃないか。

元気かな、パーシー。って、そんなことより、くろすけ手、どけてー！

12話 なんていった

『私の思い過ごしであってくれれば良かったのだが……最悪なものを見つけてしまった……』

くるすけは悔しそうに心の中で呟いた。

だから、くるすけの手が邪魔だからよく見えないんだって、手どけてって、言ってるでしょ!?

すると偶然だとは思うけど、くるすけがたじろいだことで資料がはつきりと見えるようになった。

そこに書かれていたのは、パーシヴァルとリッチを融合させた時のシミュレーション資料だった。

リッチのステータスの詳細、パーシヴァルのステータスの詳細がそれぞれ細かく書き出されてお

り、その二つを融合させるとどうなるのか、といういくつかの過程が記されていた。

魔物と人間を融合って、ヤバくない!? パーシーはどうなっちゃうの!?

『明日の同盟記念祭にはもちろんパーシヴァルも出席する。ローベルのやつ、そこでこれを実行しようとしていたのか……? はっ、いかん! 思ったより時間を浪費しておったようだ!』

くるすけは何かを察したようで急いでベッドの下へと潜り込む。その直後、ローベル宰相が部屋へと戻ってきた。

彼はくるすけがベッドの下に隠れているなんて思ってもいないように、懐から『リッチの宝玉』を取り出す。そして、薄気味悪い笑みを浮かべながら独り言を言い出した。

「くつくつく。もうすぐだ、もうすぐで私が実質この国の実権を握ることになる。リッチよ、あんなに苦労して錬金素材を集め、宝玉にしてやったのだ。貴様の働きにかかっているのだぞ」

この国の実権を握る……? 一体何を言っているんだこの人は。宰相の立場でそんなことを言うなんて、国王にでもなろうとしているのかな。

「いいかりッチ、よく聞くだぞ。明日の同盟記念祭の開幕セレモニーの最中に大衆の面前でライ

ンツ最強と言われるパーシヴァルと融合し、あの甘ったるい国王を殺害するのだ」
『なんだと……!? 国王を殺害!? ……確かにあやつは、我が国王陛下のことを少々甘いところがあるとはざいておったことがある。対象はラインツ国王陛下ではなく、自国の方か……』

「安心しろ。私の研究データは完璧だ。貴様であれば、パーシヴァルの魔力を掌握することができ。貴様はその若造の意思を乗っ取り、私が貴様を使役する。あの生意気な若造が大衆の面前で同盟国の国王にあの大層な槍を突き付けるのだ。実に滑稽ではないか」

ローベル宰相はそう言っただけでくつくくとして笑った。

……なんてこった。パーシヴァルとリッチを融合させると、パーシヴァルの身体がリッチに乗っ取られるのか。

それで表向きはパーシヴァルがザイラルル国王を殺したことにする。なんて卑怯なんだよ!

「……その後、貴様の宿ったパーシヴァルは私の采配でブルーノに殺させることにするが、まあ、貴様も主人である私の役に立って死ぬるのだから本望だろう」

こいつ、最低! とんでもなく最低なやつだ!

『ふむ。ラインツ側に罪を被せることで、同等であったラインツとの関係に差をつけるつもりか。無駄のない、卑劣な犯行だな』

「あの甘ったるい国王は死に、ラインツよりも優位に立った状態でまだ五歳のクリステイナ女王を女王へと即位させる。さすれば宰相である私に全ての実権が委ねられることになるのだ……! はははは、もうすぐ、もうすぐだぞ……!」